HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	環境と地理からみる中央アジア地域研究のあり方
Author(s)	地田, 徹朗
Citation	日本中央アジア学会報, 16, 56-57
Issue Date	2020-07-31
DOI	10.14943/jacas.16.56
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88508
Type	article
File Information	JB016_015chida.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

環境と地理からみる中央アジア地域研究のあり方

地田　徹朗

本報告要旨は、報告者によるアラル海地域に関する研究や、筆者が加わっている科研費プロジェクトの内容に言及しつつ、環境や地理といった要素をどのように中央アジア地域研究に組み込んでゆくべきかという視点から、中央アジア地域研究のあり方について展望するものである。

筆者はかつて、総合地球環境学研究所「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明：中央ユーラシア半乾燥域の変遷」（通称、イリプロジェクト）や、アジア経済研究所「長期化する生態危機への社会対応とガバナンス」研究会などに参加をし、自然科学を含む様々な分野の専門家と協働した経験をもつ。また、2008年から2010年まで在トルクメニスタン日本国大使館で専門調査員として調査業務・外交実務に従事したこともある。このような筆者の経験から、中央アジア地域について専門分野を横断して包括的な「人文知」の獲得を目指すという実践が必要だと常々考えている。現在も、牧畜、境界、環境といった視座から中央アジア地域を照射し、他地域・他分野の専門家と協働するような科研費プロジェクトに複数加わっている。

中でも、中央アジア地域研究ではミクロな地誌学的な研究が不足しており、様々な場所を実際に訪れて場所性（locality）を記述するような研究が必要だと考えている。この点、地域研究者との関心事項の違いは大きいが、民間企業やJICAによる知見の蓄積は無視できないと考えている。地誌研究としては中村泰三の一連の仕事が今なお重要であり、その後を継ぐような研究者が現れていないことから、中央アジア地域のミクロな地誌について知見を集積していくようなイニシアチブが必要だと考える。

中央アジア地域の地理学的研究については、マハッラ研究、都市景観研究、文化人類学・社会人類学的研究、労働移民研究など、人文地理学的な色彩をもった研究は存在するが、なぜか生業についての関心は薄い。また、地域の知の蓄積において自然科学者のこれまでの役割は大きいが、「人文知」や「地域知」として昇華させる上で問題があるように感じられる。その点で、イリプロジェクトは一つの画期となり、文理協働の実践の中で「場所性」と「地域

性」をめぐる研究が噛み合い、豊かな研究成果を残したといえる。だが、プロジェクト終了と共に研究コミュニティが互解してしまったのは残念であった。

これに加えて、自然科学者が先行して取り組んできた環境の要素をどのように中央アジア地域研究に取り入れてゆくのか、これも大きな課題だと言える。単純な「環境決定論」ではないが、環境による影響と人間による選択の双方の要素から中央アジア地域を見つめる必要があると言える。そして、環境研究は決して自然科学の独占物ではなく、人文・社会科学の知見は確実に環境研究において必要である。人間＝環境関係を環境＝生業（あるいは産業）関係と置き換えて考えると、それは社会のあり方や場所性の基層を形づくっていると考えられる。さらに、場所がもつ歴史的・社会的コンテキストの検討も必要であり、個々の場所に寄り添いつつ、地域全体を見渡すような姿勢で情報を蓄積していくことで、広域的な比較地域研究も可能になるのではなかろうか。筆者が加わっている、シンジルトによる科研費プロジェクトでのスコープはこのようなものである。

おわりに、報告者が考える中央アジア地域研究の今後のあり方とは、ミクロな個別的な場所性を明らかにしつつ、最終的に中央アジアという地域を総合的に捉えること。そして、それに基づいて他地域の研究者たちと対話をし、成果を分かりやすい形で社会に発信してゆくこと、このようなものである。これは、中長期的なスパンで考え、文理協働や学際性を意識し、かつ、社会との関係の中で実践すべきことである。しかし、科研費の配分がジリ貧になる中で否応なしに国際化や成果主義と向き合わねばならないという現実や、若手研究者が減り続けているということに鑑みると、中央アジア地域研究の将来について楽観視は決してできないこともまた確かである。

（名古屋外国語大学世界共生学部）